6) 庄武孝義・野澤　謙・川本　芳・足立　明・林　良博・西田隆雄（1988）：ネパールの在来家畜に関する研究．ネパール在来山羊の遺伝的変異性．第80回日本畜産学会（東京）．
7) 庄武孝義・野澤　謙・川本　芳・足立　明・林　良博・西田隆雄（1988）：ネパールの在来家畜に関する研究．アジアゾウ種内の遺伝的分化．第80回日本畜産学会（東京）．
8) 庄武孝義（1988）：シェルパ族飼養のヤク，ウシ，それらの雑種の遺伝的変異性．在来家畜研究会（東京）．
9) 峰澤　満・八木欣平（1987）：ボリビア産ティティ（*Callicebus*）とホエザル（*Alouatta*）の核型について．第3回日本霊長類学会（大阪）．

生活史研究部門

杉山幸丸・森　明雄・宮藤浩子[1]

研究概要

1) 西アフリカの熱帯多雨林および乾燥サバンナに生息する狭鼻猿の比較生態学

杉山幸丸・森　明雄・大沢秀行[2]・三谷雅純[3]・中川尚史[3]・室山泰之[3]

カメルーン国南部の熱帯多雨林・カンポ動物保護区に同所的に生息し混群形成もするチンパンジー，マンドリルおよび樹上性・半樹上性サル類5種について，森林適応の観点から現地調査した。一方，同国北部の乾燥地カラマルエではパタスザルの採食行動からみた環境適応を社会構造との関係において現地調査した。これらを合わせて，各種の社会構造にまでおよぶ行動様式の環境適応を比較考察している。

2) 西アフリカ生息チンパンジーの行動生態学

杉山幸丸・松沢哲郎[4]・佐倉　統[3]・アリ＝スマ＝ガスパール[3]

ギニア国ボッソウに生息する野生個体群を個体識別の下に11年に及んで追跡し，社会行動と社会構造の変化過程を分析した。一方，ギニア国全域のチンパンジーの分布と生息個体数を明らかにする努力も進めている。また，ボッソウで発見された石器使用を含む道具使用行動の技術・伝播・変容を野外実験を含めて追跡・分析し，チンパンジーの分布全域にわたる文化圏形成の理論化を進めている。

3) ニホンザルの個体群動態および採食生態学的研究

杉山幸丸・大沢秀行・中川尚史・佐倉　統・アリ＝スマ＝ガスパール・芝原総子[5]

大分県高崎山の餌付け個体群を対象に採食量と繁殖成功度を示す人口学的パラメーターが17年にわたって追跡記録され，パラメーター相互に強い関係が明らかになったので順次公表の準備を進めている。また，宮城県金華山では季節変化による食物供給とそれに対する採食方法の変化を，長野県志賀高原ではハナレオスの群れへの接近状況から雌の排卵期をめぐる両性間の繁殖戦略を探った。一方，社会部門と共同で所内放飼場若桜群における全ての性行動の追跡記録をとり，各性・各社会的地位による繁殖戦略と繁殖成功度を明らかにしつつある。

4) 動物における種内子殺しの社会生態学

杉山幸丸

ハヌマンラングールで最初に確認された野生動物（哺乳類）社会における種内子殺しの近因と遠因，その相互関係を，野外調査を交えながら理論的に考察している。

5) ニホンザルのメスの順位形成のメカニズムの研究

森　明雄・渡辺邦夫[6]

幸島群におけるメスの順位の変遷を継年的に分析し，順位がどの程度維持・継承されるのかを調べた。また家系順位，姉妹間の順位関係が，川村の順位形成に関する仮説に従っているのかどうかの検討を前年に引き続いておこなった。

6) カメルーン国カンポ動物保護区における罠猟の研究

森　明雄

カンポ動物保護区では樹上性霊長類の研究を行っているが，サイド・ワークとして，現地の人々の生計活動の中で重要な役割を占める跳罠猟の調査を行ってきた。特に，獣道やそれを通過する動物に対する現地の人々の認知構造の分析を行っている。

---

1) 非常勤講師　2) 社会研究部門　3) 大学院生　4) 心理研究部門　5) 研修員　6) ニホンザル野外観察施設

総　説

1) Sugiyama, Y. (1987): A review of infanticide among Hanuman langurs and other primates. J. Bombay Nat. Hist. Soc. 83 (suppl.): 7—11.
2) 杉山幸丸（1987）：サル・種内子殺し．科学朝日　11月号：51-55.
3) 沢口俊之・宮藤浩子（1987）：霊長類社会の進化理論ーその総合化の試みー．霊長類研究 3(1):48 — 58.
4) 佐倉　統（1987）：霊長類社会生物学に関する理論的覚書ーその擁護と拡張．霊長類研究 3(1):33 — 42.

論　文

1) Mori, A. (1987): Utilization of fruiting trees by monkeys as analyzed from feeding traces under fruiting trees in the tropical rain forest of Cameroon. Primates 29: 21—40.
2) Kudo, H. (1987): The study of vocal communication of wild Mandrills in Cameroon in relation to their social structure. Primates 28: 289—308.
3) Hirotani, A. (1987): Grouping pattern and inter-group relationships of Japanese wild boars (*Sus scrofa leucomystax*) in the Rokko Mountain area. Ecological Research 2: 77—84.

報告・その他

1) Sugiyama, Y. (1987): Japanese monkey: on the way to extinction. Intl. Primat. Protect. Leag. NL.14(2): 15—16.
2) 杉山幸丸（1987）：文化は適応的行動様式．Net. Evol. Biol. 4: 9—10.
3) 大沢秀行・杉山幸丸（1988）：ニホンザルの群れ分裂と社会的順位．ニホンザルにおける採食戦略の社会学（杉山幸丸編），9 — 16.京大霊長研.
4) Sugiyama, Y, and Ohsawa, H. (1988): Population dynamics and management of baited Japanese monkeys at Takasakiyama. ニホンザルにおける採食戦略の社会学（杉山幸丸編），1 — 8. 京大霊長研.
5) 森　明雄（1988）：コンピューターを用いた多数個体の優劣順位序列の決定ー「ニホンザル幸島群におけるオトナメス間の順位序列の経年変化の研究」のサイド・プロダクト．ニホンザルにおける採食戦略の社会学（杉山幸丸編），17 — 31. 京大霊長研.
6) 森　梅代・宮藤浩子（1987）：霊長類のメスの一生における育児行動および母子関係の変遷に関する研究ー人間の育児行動，母子関係の系統発生を探るー．安田生命事業団研究助成論文集，22(2):153 — 159.
7) 佐倉　統（1987）：ニホンザル雌の繁殖戦略ー雌は雄をだましているか？　遺伝 41(11): 54 — 62.

学会発表

1) 杉山幸丸（1987）：西アフリカチンパンジーの狩猟・肉食行動．第24回日本アフリカ学会大会，研究発表要旨：5.
2) 森　明雄（1987）：カメルーンの熱帯多雨林における樹木の集中分布と種子分散について．第24回日本アフリカ学会大会
3) 森　明雄（1987）：採食樹下の果実の食痕から見た，サルによる果実の利用ー西アフリカ，カメルーンの熱帯多雨林における例．第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3:154.
4) 宮藤浩子（1987）：幸島ニホンザル小群の遊動と結合機構．第34回日本生態学会大会，講演要旨集：165.
5) 宮藤浩子（1987）：ニホンザル幸島群における未経産メスの社会行動ー出産期の重要性ー．第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3: 172.
6) 宮藤浩子（1987）：ニホンザル幸島群における未経産メスの社会行動ー行撃性と周辺化傾向ー．第41回日本人類学会日本民族学会連合大会，研究発表抄録：57.
7) 三谷雅純（1987）：熱帯多雨林における果実食者にとっての餌資源の空間的集中性とその影響．第34回日本生態学会大会，講演要旨集：176.
8) 三谷雅純（1987）：熱帯多雨林における果実食者にとっての餌資源の空間的集中性とその影響（その2）．第24回日本アフリカ学会大会，研究発表要旨：49.

9) 三谷雅純（1987）：南西カメルーン・熱帯多雨林におけるシロエリマンガベイの採食行動と土地利用．第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3:154.
10) 広谷　彰（1987）：交尾期におけるトナカイ（*Rangifer tarandus*）のメスのグルーピング．第34回日本生態学会大会，講演要旨集：165.
11) 広谷　彰（1987）：フィンランドにおける半家畜トナカイの社会関係とその管理．第41回日本人類学会日本民族学会連合大会，研究発表抄録：57.
12) 中川尚史（1987）：金華山島における野生ニホンザルのエネルギー収支と食物選択．第34回日本生態学会大会，講演要旨集：167.
13) 中川尚史（1987）：カメルーンにおけるパタスモンキーの活動時間配分と食物．第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3:155.
14) 室山泰之（1987）：ニホンザルにおけるグルーミング行動の構造．第34回日本生態学会大会，講演要旨集：168.
15) 室山泰之（1987）：ニホンザルにおけるグルーミング行動ー持続時間の分析．第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3:173.
16) 佐倉　統・沢口俊之（1987）：表現型の階層ネットワーク構造ー行動の進化に関する概念的モデル．第34回日本生態学会大会，講演要旨集：181.
17) 佐倉　統・巌佐　庸・常田英士・長谷川寿一（1987）：ニホンザルのハナレオスは交尾期のいつごろ群れを訪れるか？　第3回日本霊長類学会大会，霊長類研究 3:150.

生理研究部門

大島　清・目片文夫・林　基治・野崎真澄・清水慶子[1]

研究概要

1) マカクザル胎児の感覚系発達に関する生理学的研究

大島　清・清水慶子

マカクザルの胎生各期における感覚系の発達を電気生理学的・生化学的に解明する。

2) サルにおける銅付加子宮内避妊器具の避妊効果及び安全性

大島　清・清水慶子

3) ニホンザルの繁殖期の季節性のメカニズムの神経内分泌学的研究

大島　清

4) サルとヒトの比較セクソロジー

大島　清

5) 血管平滑筋細胞膜の電気生理学的研究

目片文夫

i) パッチクランプ法による平滑筋細胞膜の単一イオンチャネル電流の熱力学的解析

ii) 血管内皮細胞により放出される血管弛緩物質の細胞膜に対する作用機序の解析

6) サル脳内神経活性物質の個体発生

林　基治・山下晶子[2]・清水慶子

CCK-8のサル大脳皮質各領野の濃度を胎生120日，満期，成体時で定量した。胎生120日でどの領野においてもペプチドを認められ，満期まで増量するが，成体期では減少していた。ソマトスタチンの発達を免疫組織化学法を用いて調べた。胎生120日より新生児に到るまで細胞数は増加したが成体時では細胞数は急減していた。この結果は，以前のラジオイムノアッセイの結果と一致していた。

7) サル脳内神経活性物質の分布特性

林　基治

神経成長因子（NGF）に対する抗血清を作製し，高感度エンザイムイムノアッセイ法を開発した。現在，サル中枢神経系における分布について検索を開始した。

8) 霊長類の生殖リズムの発現機序

野崎真澄

霊長類の生殖リズム，特にニホンザルの季節繁殖リズムの発現機構を明らかにするため，過去数年間，人工気象室内でサルを飼育して，日長の単独操作及び日長と環境温度の同時操作を行ってきた。現在，それらの血液試料について，ホルモンレベルの解析を進めている。

9) 霊長類における各種免疫ホルモンと成長因子の局在性

野崎真澄

インターフェロン，インターロイキン，血小板由来成長因子，インスリン様成長因子等の免疫ホ

1) 教務職員，2) 大学院生